

## 早稲田大学 国際教養学部 古文 講評

### 〔総合分析〕

出題形式	マーク式
試験時間	60分（現代文2問、古文1問）
出典	『たまきはる』
解題	藤原俊成の娘・健御前（定家の姉）の日記。1219年頃に成立。

### 〔設問別講評〕

大問番号	設問番号	コメント	難易度
(三)	問十四	<b>内容理解</b> ：4行目に「昼寝」とあり、5行目「例の見まゐらせし」を、1行目の「常に夢に見まゐらせし」と対応させれば、つづく「冷泉院殿～」以降が夢の中の描写とわかる。「例の」は「いつものように」と訳す重要古語。	標準
	問十六	<b>主語把握</b> ：6行目「この三位殿の」の「の」は主格で「が」と訳す。つまり「三位殿が」「局へ立ち寄りて」、そして傍線部「帰られし」と続く。「坊門殿」は先述の「母と頼みし人」と同じ人で、作者の姉に当たる人。注も無く、分かりにくい部分なので、訳しきれなかったであろう。その場合は上記のように、動詞（立ち寄り・帰ら）からだけでも解くことができた。	標準
	問十八	<b>解釈</b> ：直後に「珍しくのみ聞こゆる」とある。	易
	問十九	<b>内容理解</b> ：直前の「昔の御事」とは健春門院の生存中のこと。それが筆者には「跡もなき心地」に感じられ、寂しさが増している状況なのである。	標準

### 〔総合コメント〕

昨年と比較し、問題文の長さはほぼ同じ。設問数も変わらず。目立った違いは文法問題が無くなったこと。人物等の注が少なく、受験生にとっては内容を掴みきれず、難しいと感じたかもしれないが、個々の設問を解く手順としては決して難度の高いものではない。

学習対策としてはまず第一に基本単語（問十四・十五）を確実にすること。次に敬語法を理解・習得することで、主語を補いつつ丁寧に読解する（問十三・十六）力が付く。

04・05年と比べて昨年・そして本年は確実に難化している。英語重視の学部だと思い、甘く見ていてはいけない。